（国立大学法人用）

平成２８年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」成果報告書

団体名	国立大学法人愛知教育大学

Ⅰ　概要

１　事業の概要

１　モデル地域の概要

愛知教育大学附属特別支援学校	児童生徒数	60 名	教職員数 31 名
愛知教育大学附属岡崎小学校	児　童　数	606 名	教職員数 28 名
愛知教育大学附属岡崎中学校	生　徒　数	474 名	教職員数 29 名

２　事業の目的

・障害のある児童生徒とない児童生徒が、ともに運動する方法を追究する児童生徒の育成

・実践の結果を地域に示し、地域の障害者理解の取組として発展させること

３　事業の目標

・低い年令段階から体験的に障害に対する理解を深める

４　事業の内容

・障害のある児童生徒とない児童生徒が運動を通した交流を行うことにより、障害のある児童生徒の特性を理解した肯定的な態度が形成されるよう支援する。

・ともに運動する方法を追究することについて児童生徒の取り組んだ経過を分析して提示する。

・取り組んだプログラムの難易度を分析し地域の活動への指針とする。

２　事業の成果

１　「体ほぐし運動」を通じた交流

「チャレンジ運動」仲間同士の共同で課題を達成する運動遊び

附属岡崎小学校 2 年 3 学級と附属特別支援学校小学部の体育での共同学習

（１）目　標

・運動を通した交流を行うことにより、障害のある児童の特性に目を向けられるようにしたい。

・ともに運動を楽しむ方法を追究する児童にしたい。

（２）取組みや実施の工夫

・附属岡崎小学校の児童が作った海の生き物の絵を壁一面に掲示し、楽しい学習環境となるようにした。

・附属岡崎小学校のホールに、セーフティマット、エアマット、エアロールの３つの場のある「エアマットランド」で、跳ぶ、転がる、走る運動を通した共同学習を実施した。

（３）成　果

・児童が全身を使って体を動かすことができる教室の環境と、「体つくり運動」という運動領域での共同学習を計画したことで、低学年においても、特別支援学校の児童の動きに注目し、特別支援学校の児童の動きのよさに気づくことができた。

・跳ぶ、転がる、走るなどの運動は、特別支援学校小学部の児童が興味・関心のある

運動だったため、40 分間動き続け、運動の量を確保できた。各学校の児童の興味・関心のある遊びや運動ができる教具を選定することが大切である。

・体ほぐし運動を通した交流は、障害に対する認識が低い低学年の児童において、特別支援学校の児童の動きや特性を認め、児童たち同士で交流を深めることにつながった。

・附属特別支援学校の児童たちが，附属岡崎小学校の児童の動きを真似して挑戦しようとする姿が見られた。

・交流及び共同学習の様子を参観した附属特別支援学校と附属岡崎小学校の保護者同士の交流もできた。

２　「ふれあいゲーム」交流･ふれあいを通じた運動遊び

附属岡崎小学校３年２学級と附属特別支援学校小学部すみれ学級との共同学習

「みんなのいいところ　いっぱい見つけるよ

－附属特別支援学校　いっしょに楽しくお友だち交流－」

（１）目　標

・附属特別支援学校の児童との交流を通して、附属特別支援学校の児童の人格と個性にまで目を向けられるような児童にしたい。

・附属特別支援学校の児童と一緒に楽しく遊びたいという思いや願いを実現するために、よりよい接し方を見つけ出そうと、仲間と互いの考えや知恵を出し合うことのよさを感じ、生活のなかでも取り入れようとする児童にしたい。

（２）取組みや実施の工夫

・元気よく体を動かして遊ぶことが好きな附属特別支援学校のすみれ学級の児童が、工事のため遊具を使えないことを知った児童に、すみれ学級の児童と出会わせた。

・問題解決学習を展開した。児童の意識をとらえ、意識のずれがみられたときに、話合いを行い、児童自らが、一緒に楽しく遊べる方法を考え、活動を見直せるようにした。

・附属特別支援学校の児童の喜びを、附属特別支援学校の教諭から伝えてもらうことで、相手のことを考えて活動してきた喜びを感じられるようにした。

（３）成　果

・出合わせから最後の交流まで 10 回の共同学習をしたことが、附属特別支援学校の児童の好きなことや長所に気づき、特別支援学校の児童に寄り添った交流につながった大きな要因であった。

・児童の意識をとらえ、意識のずれが見られたときに話し合うことは、児童が一緒に楽しく遊べる活動へと見直す姿を引き出すことができた。

・活動の様子を第三者から価値付けすることにより、活動に対する児童の達成感や満足感をあじわうことができた。

・交流活動後半から、交流の時間だけでなく、登校での挨拶を交わす姿が見られるようになった。

・交流を経て，附属岡崎小学校の同じ学年の児童とのかかわり方を見つめ直し、仲間の個性や特徴を受け入れられるようになった。

３　「障害に配慮したスポーツ」の生徒による開発

「簡易ゲーム」などのスポーツ交流会

附属岡崎中学校（希望者）と附属特別支援学校高等部１年生とのスポーツ交流会

（１） 目　標

・附属岡崎中学校の生徒が計画したスポーツ交流会を通して、他を思いやり、ともに活動することの楽しさを実感する。

（２） 取組みや実施の工夫

・個人追究学習で障害者について調べてきた附属岡崎中学校の生徒を中心に、スポーツ交流会を計画した。

・活動に対する価値付けを、交流会後に附属特別支援学校の教諭から伝えてもらうことで、振り返りをした。

（３） 成　果

・中学生になると、障害のある生徒に対して、世話してあげなければという意識が強い。スポーツ交流会を運営するという意識とともに、一緒になってスポーツを楽しむという意識を育てるには、実際に交流してみて、附属特別支援学校の教師や保護者と振り返りの場をもつことで、遠慮せずに、一緒になってスポーツを楽しむ気持ちが足りなかったことに気づかせることができた。

・障害のある生徒と一緒に運動する難しさとともに、一緒に活動する楽しさを、教諭生徒ともに実感できた。

３　事業の課題とその解決のために必要な取組

・各校の教諭同士が連絡を取り合い、ねらいを明確にするとともに児童たちの様子や対応について共通理解をする時間を確保する。そのためには、１年間を見通し、計画的に進める必要がある。モデル地域の三校は、平成28年度に共生教育（インクルーシブ教育を展望した小、特支、中の連携による教育活動）の目標、計画を作成した。修正を加えながら、１年間の交流を充実させていく。

・交流及び共同学習を通して何を身につけさせたいのかを、障害のある児童生徒、ない児童生徒それぞれについて、各学校で明確にしたい。事前打合せで、各校の目標を確認することで、各校の教諭も意識して児童生徒に対応ができる。

・交流及び共同学習を行った学級では、障害のある児童生徒への意識の変容があったと言える。それを全校に還元できる場があるとよい。各校で、取り組んだ内容、感想、学びを共有することで、全校が意識できるようにしたい。

・各校の教諭の児童たちをとらえる視点が違い、思いが違うと感じた。教諭同士の交流を継継的に深めるとともに、専門的な視点から助言をいただくコーディネーターとのつながりを継続していきたい。